

式 辞

学校長 下村 昌弘

霞初めてたなびく。72 候では、3 月手前のこの季節を「霞初めてたなびく」と呼びます。

大寒波による雪や氷が解け、雪に変わり雨が降る「雨水」と呼ばれる季節も、はや、折り返しを過ぎ、御船山にも春霞がたなびく季節となりました。柔らかくほのかに霞んで見えるその様子は春の兆しを感じさせてくれます。

こうした中、武雄市教育長 松尾文雄様をはじめ、武陵会会長 徳永壮太郎様、PTA会長中川内昇様、本校学校運営協議会会長 岡本忠裕様、その他、多くのご来賓の方々のご臨席を賜るとともに、たくさんの3年生の保護者の皆様のご参列を得て、本日ここに令和6年度佐賀県立武雄高等学校第16回卒業証書授与式を挙行できますことを心より感謝申し上げます。

本日めでたく卒業される226名の皆さん、そして保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。

振り返ってみれば、皆さんが過ごした高校生活は新型コロナやインフルエンザ、そしてマイコプラズマといった、ウイルスによる感染症の脅威にさらされるとともに、新しい社会環境に遭遇した日々でした。

皆さんは、毅然とした態度で、そうした状況に対峙し、乗り越え、揺るぎない信念と柔軟な思考で、新しいスタイルを確立してくれました。その姿に私は皆さんのたくましさとしなやかさを感じました。

特に今年度、春、中高が一つになった歌垣山への合同遠足。大きな解放感を味わいました。

そして夏、北部九州全国インターハイや国スポ 2024 においては少林寺拳法部、弓道部をはじめとしたたくさんの活躍がありました。

初めてのケーブルワンスポーツパークでの文化祭、自分たちで製作した舞台のしつらえには大変感銘を受けました。そして青春の全てを出し切り、全校が一つになっ

た体育祭。

学業の方でも授業はもとより、補習やセミナー、模擬試験にも一人一人が真剣に取り組み、自分を鍛え上げました。

皆さんが過ごした3年間で、本校もどんどん新しい“武雄高校らしさ”を確立することができました。皆さんの姿は多くの中学生が本校を選ぶ大きなきっかけとなっています。本当にありがとう。

これは本校の強みである“体験”を“経験”に変える探究的な学びが武高文化、すなわち武雄高校が最も大切にしている共通の価値観になり、より自立的に学校生活を送る皆さんの生き生きとした姿が見られるようになったからだと思います。

皆さんはここで培った力をこれからの社会でさらに高め、発揮していかなければなりません。しかしその社会も決して平穏ではなさそうです。

今年は、戦後80年、昭和の元号で100年めに当たる節目の年です。長い間戦争がない平和な日々を積み重ねることができたことをうれしく思うと同時に、私たち自身も主体的に社会の構成者としての責任を果たさねばなりません。

しかし、どうでしょう。世の中は分断の危機に常にさらされ、社会は誹謗中傷、個人主義が誤った形で流布していると感じるケースも散見されます。

今はVUCAと呼ばれる先行き不透明な時代です。これまでになかった問い、何が正解なのかも分からない問い、複雑で混沌とした問い、こうした問いに皆さんは正面から立ち向かわなければなりません。

これまで先人たちはそれぞれの時代の問いに対してその課題状況を緻密に分析し、専門的な見地からその解を見出し、社会の発展を遂げてきました。

しかし、現代は環境問題一つにしても、その要因は複雑に絡み合っており、一つの専門分野からだけでは解決することができません。

皆さんは、小学校の頃、魚の解剖をしたことがあるでしょうか。生きたフナの頭を木槌でたたき、痙攣させ、肛門からはさみを入れる。そして内臓を腑分けし、教科書や図表と見比べ、その臓器の一つ一つを確かめる理科の観察です。

この過程こそが問題点を一つ一つ切り分けて分析する、極めて科学的なアプローチの仕方だと言えます。

しかし、解剖・観察の後、五臓六腑をもとの位置に戻したとしても、それはもうすでに「魚」ではありません。そういう違和感をいただいた人も、この中にはいるのではないのでしょうか。

フランスの昆虫学者であるファーブルの名前は皆さんも聞いたことがあるでしょう。そのファーブルは『昆虫と暮らして』という書物の中で次のように言っています。

あなたがたは、研究室で虫をひどい目に合わせたり、こま切れにしたりして、研究してられる。わたしは、セミの声にかこまれ、青空の下で観察しています。あなた方は、細胞や原形質を薬品を使って実験してられる。わたしは、本能のすばらしいあらわれ方を、研究しているのです。あなたがたは、死体をせんさくしてられる。わたしは、生きた生命をしらべているのです。

分析という、細かく丁寧に腑分けしていくことは学問的な手法として極めて重要です。しかし同時に私たちはその分析の過程で何か大切なものが失われることに対しても自覚的であらねばなりません。

そこに気づくには、洞察、直観を大切にすることが必要です。本質を直観的に見抜く力です。この力を身につけるには高度で長期の修練が必要です。

評論家田坂広志は言っています。「直観は過たない。過つのは判断である」と。

これを真実とするために皆さんはこれから豊かな体験を積む必要があります。私はこれまで折に触れて「人間の性向は25歳くらいまでに決まる」と伝えてきました。そしてピカソを引き合いに「皆さんが将来どんな“ゲルニカ”を描くかは“青の時代”に何をつかむかにかかっている」と檄を飛ばしてきました。これからの数年間が皆さんの人生を方向付ける大きな転機にかかります。

だからこそ、大いなるトライ&エラーを期待するのです。多くの失敗を経験し、多くの思索をとおし、洞察する力、直観する感性を身につけてほしいのです。

御船山は、武雄の象徴であるとともに、近代日本の幕開けの象徴でもあります。その御船山の懐で学んだ皆さんにとって、今まさに、TAKEO Future Frontier “TAKE OFF!” 武雄高校から未来の開拓者として羽ばたく時です。

「友よ叡智を磨くべし」。これからも互いを刺激し合える仲間を大切に「明日の時代を担う」存在になってください。それが本校を卒業する皆さんの使命です。

結びになりますが、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。3年担当者をはじめ職員一同、心からお祝いを申し上げます。保護者の皆様にはこれまで物心両面にわたり、本校教育活動への御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございました。皆様の御支援なくしては本校の教育活動をこれほど円滑に進めることはできませんでした。高いところから甚だ恐縮ではございますが、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。今後、お子様のますますの御活躍を心から応援し、祈念しております。

卒業生の皆さん、今日家に帰ったら、ぜひお家の方に一言御礼を言ってください。「これまでありがとう」と。できれば手を握って差し上げてください。皆さんが生まれたときは柔らかかったその手も、今はきっとガサガサごつごつです。

その手が18年間皆さんを育ててくれた手です。皆さんを高校に通わせるために大変な苦勞をなされた手です。どうか手を握ってお礼を言ってください。

では、皆さん、名残は尽きませんが、お別れの時が来ました。また会える日を楽しみにしています。それまで心と体に気をつけてたくさんの経験をしてください。

卒業おめでとう。

令和7年2月28日

佐賀県立武雄高等学校長 下村 昌弘